

スポーツボランティアにおける学習成果の仮説モデルの生成

— Jリーグのボランティアを経験した大学生に着目して —

Hypothetical models of the learning results in sports volunteer

— Focusing on university student who experienced volunteer of J-League —

体育学部体育学科
常浦 光希
TSUNEURA, Kouki
Department of Physical Education
Faculty of Physical Education

体育学部体育学科
田原 陽介
TAHARA, Yosuke
Department of Physical Education
Faculty of Physical Education

体育学部体育学科
山本 孔一
YAMAMOTO, Koichi
Department of Physical Education
Faculty of Physical Education

キーワード：スポーツボランティア, Jリーグ, 大学生, 学習成果

Abstract : In recent years of exercise and sports activities, without the presence of volunteers to support the volunteer leaders and club management, the dissemination and maintenance of activities has become impossible. In this study, it is an object of the present invention is to clarify the learning outcomes.

Below, two hypotheses have such clearly.

- 1) Sports transformation of view
- 2) Expansion of values

Learning outcomes revealed by the study is a hypothesis. Also ongoing research future, it is necessary in terms of going to grasp the learning outcomes.

I. 問題・目的

運動・スポーツとのかかわりは、する、みる、支えるといったかかわり方の拡がりや運動・スポーツ実践の主体である地域住民の価値観や生活スタイルの多様化など、複雑化している現状にある。我が国では、2011年にスポーツ基本法が制定され、人々が豊かな運動・スポーツ生活を享受できる運動・スポーツ活動の機会を保障するとともに、その活動を支えるシステムづくりや拠点づくりが緊急かつ重要な課題として挙げられている。日常的にスポーツと親しみ、スポーツを楽しむ、スポーツを支え、スポーツを育てる活動に参画する機会が確保されるためにも、スポーツを実際に

するだけでなく、トップレベルの競技大会やプロスポーツの観戦などといった、スポーツをみる人、指導者やスポーツボランティアなどのスポーツを支える人にも着目し、生涯にわたって運動・スポーツと親しむことができる環境を整備することが求められている。このように多様・複雑化してきた近年の運動・スポーツ活動は、総合型地域スポーツクラブやスポーツ少年団等におけるボランティア指導者やクラブ運営を支援するボランティアの存在なしには、活動の普及・維持は不可能になってきた(山口, 2004)。さらにスポーツ界において国内で世界大会クラスのビックイベントが次々と開催され、数千人のボランティアが参加し、大会の成功を導く大きな力となっている。2020年に東

京オリンピック・パラリンピックを控える日本において、このようなビッグイベントや日頃の地域スポーツ活動にボランティアとして参画できる人材の育成・確保は不可欠である。このようなスポーツ推進のために行う活動に参加したボランティアは「スポーツボランティア」と定義され、20年ほどたつがその実施率は、これまでの時系列変化をみても、過去18年間1割以下にとどまったままである（笹川スポーツ財団、2014）。さらに、スポーツボランティア活動において、「メンバーが高齢化し、後継者が不足している」や「活動内容に関する情報が少ない」といった課題が挙げられており（日本スポーツボランティアネットワーク、2015）、新規のスポーツボランティア実施者を養成・維持していくことが今後のスポーツ活動の発展・普及への重要な課題である。

スポーツボランティアとは、地域におけるスポーツクラブやスポーツ団体において、運営や指導活動を日常的に支えたり、競技大会の運営を支える活動を指している。図1に示すように、スポーツボランティアの活動内容は、クラブ・団体ボランティア、イベントボランティア、アスリートボランティアの3種類に大別されており、それぞれの活動形態は多岐にわたっている（笹川スポーツ財団、2014）。これまでのスポーツボランティアに関する先行研究を概観すると、特にイベントボランティアに焦点が当てた研究が多く行われている。イベントボランティアに参加するスポーツボランティア実施者を対象にした参加者情報や参加動機といった活動意欲の要因分析に関する研究（長ヶ原ほか、1991）や活動状況や活動意識といった実施者の満足感、継続意志が明らかにされてきている（松

尾、1998）。これは、イベントボランティアといった不定期活動を運営するためには、多くのボランティア人材を必要とし、ボランティアを必要とする組織にとって、ボランティアの力が必要とするときに、参画する人材を如何に確保するかという共通課題があるためである。組織がスポーツボランティアを募集する際に、自分たちの活動に参画する人の年齢や職業などのプロフィールや参加する動機、ニーズ、条件といった活動に関する諸要因を把握・分析することは重要なことである。特に、スポーツの分野において、地域のスポーツ活動から世界大会レベルまで、様々な場面にボランティアが必要となり、また活動内容も多様化していることから、その組織に適したボランティアを募集するためには、誰が、どうして、どのようにしてボランティアになるのかを分析し、効果的にボランティア募集を行うことが不可欠となる。今回調査対象とする大学生（以下、学生）は、体育・スポーツ系の学部・学科の学生や大学運動部に在籍する学生であり、ある程度の専門知識を有していると考えられる。まさに今後のスポーツ界を担う人的資源として期待される。このような学生にとって、スポーツボランティア活動を行うことは、どういった意味があり、どのような成果が得られているのかを明らかにすることは、大学側にとっても重要であるといえるだろう。これまで大学生を対象としたスポーツボランティアの研究は、大学生のニーズを検討した研究（内藤、2007）やイベントボランティアに参加する大学生を対象として、豊田・金森（2007）は、実際のスポーツボランティア参加者の思いに着目し、意識変化のプロセスについて調査し、参加学生が消極的態から活動を通じて積極的に変化

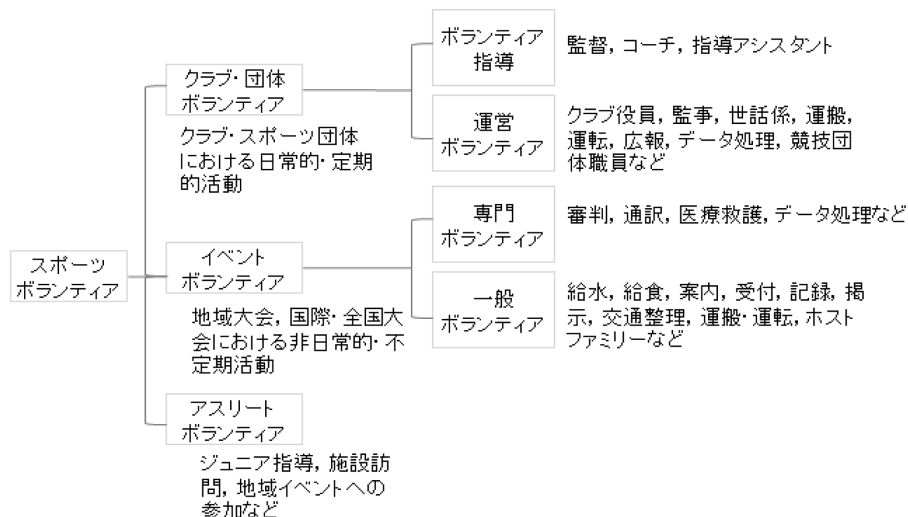


図1 スポーツボランティアの役割と範囲（参照：笹川スポーツ財団、2004）

していく様相を明らかにした研究が挙げられる。これらの研究から、山下・行實（2015）により、若年層の集客方策及び運営ボランティア制度の確立をねらいとして、Jリーグの運営ボランティアに参加する学生の意識変容プロセスについて質的調査から、運営ボランティアの体験プログラムに関するマネジメント課題を検討している。このように大学生のスポーツボランティア活動におけるニーズや意識変化を捉え、スポーツボランティア体験のプログラム化が検討され始めている。今後のスポーツボランティア普及のために、参加者が求める活動を提供できるプログラムを開発することは、多様化したスポーツ活動を支える人材育成の寄与につながると考える。

そこで本研究では、スポーツボランティア活動による意識の変化を学習成果として構造化していくことをねらいとし、イベントボランティアに参加する学生を対象として、学習成果を明らかにすることを目的とする。

Ⅱ. 方法

1. 調査の概要

本研究では、環太平洋大学体育学部体育学科に在籍する学生であり、Jリーグでのボランティア実習を行う「ボランティア活動論」履修者を対象とした。本調査は、2015年度4月から8月内にボランティア活動に参加した65名に、「スポーツボランティアを通してどのような成果があったのか」、「スポーツボランティアを通して得たことをどのようなことに活かしたいか」の2点について自由記述式調査を実施し、直接配布・回収した。

2. 調査対象ボランティアの概要

本調査では、イベントボランティアに含まれるJリーグの運営ボランティアでの活動を対象とする。1993年に誕生した日本初のプロサッカーリーグは、発足当時10クラブであったが、1999年にはJリーグディビジョン1（J1）とJリーグディビジョン2（J2）の二部制に移行し、2014年からはJ3リーグ（J3）を創設し、現在は36都道府県51クラブを有するプロリーグである。Jリーグでは、地域に根差したクラブづくりの取り組みの1つとして、地域住民がボランティアでホームゲームの試合運営に参加する仕組みを展開している。Jリーグの37クラブがこの仕組みを導入しているが（2013年7月）、実際の運営体制や活動内容は、

各クラブによって違いがある（山下・行實、2015）。そのため、Jリーグのボランティア活動として把握するよりは、個々のクラブにおけるボランティア活動として把握していくことが望ましいと考える。そこで、本研究における対象クラブは、環太平洋大学と同県にホームスタジアムを置き、J2リーグに所属する（2015年時点）岡山ファジアーノにおけるクラブ内のボランティア活動を対象とすることとした。

3. データの分析

スポーツボランティア活動を経験した学生の「学習成果」の内容について把握することを目的としているため、文献・資料のテキスト分析とスポーツボランティア活動者への自由記述式調査によって学習成果を把握していくこととした。自由記述式調査では、回収された有効回答のうち、調査期間内に3回以上スポーツボランティア活動に参加した12名を対象とすることとした。学習成果を抽出する際に、有識者2名によってKJ法を行い、学習成果を分類・整理を行った。その結果を先行研究に沿いながら、カテゴリーに分類し、そのカテゴリーをもとに、最終的にカテゴリーグループを決定した。

4. スポーツボランティアの定義

スポーツボランティアの定義をSSF笹川スポーツ財団の「スポーツライフ・データ2006」より引用し、「報酬を目的とせず、自分の労力・技術・時間を提供して地域社会や個人・団体のスポーツ推進（レクリエーションも含む）のために行う活動である。ただし、活動に必要な交通費等の実費程度の金額の受け取りは報酬に含まない。」とし、本研究における定義とする。

Ⅲ. 結果と考察

1. 学習成果のカテゴリー化

Jリーグのボランティアに参加した65名の有効回答のうち、3回以上ボランティア活動を行った12名を分析対象とした。その中から、カテゴリー作成のために項目化していき、76個の項目が抽出され、そのうち、同一の内容が書かれている回答および重複する回答をまとめて、76個の項目を分類・整理した。得られた回答を入力後、KJ法による分類・整理を行った。その結果7のカテゴリーが見出された。さらに、カテゴリーをもとに、豊田・金森（2007）や内藤（2007）などの先行研究におけるスポーツボランティアに関する

要因を参考としながら、最終的に2つのカテゴリーグループを決定した。さらに、得られたすべての回答に対し、自由記述で得られた行動がどのカテゴリーグループに分類されるかについて、筆者を含むスポーツ経営学を専門とする大学教員2名のそれぞれで評価を行った。その際、意見が一致したものを採用とし、意見が分かれたものについては協議を行って、カテゴリーグループを決定した。表1に示しているように、カテゴリーとして、「従事による肯定的変化」、「プロクラブへの認識変化」、「必要性の発見」、「積極的思考」、「新たななる挑戦思考」、「新しい自己への気づき」、「他者への気づき」という7つのカテゴリーに分け、それらのカテゴリーをカテゴリーグループとして分類した結果「スポーツ観の変容」、「価値観の拡大」の2つカテゴリーグループを設定した。

表1 スポーツボランティアの学習成果

カテゴリーグループ	カテゴリー
スポーツ観の変容	従事による肯定的変化
	プロクラブへの認識変化
	必要性の発見
価値観の拡大	積極的思考
	新しい自己への気づき
	他者への気づき
	新たななる挑戦思考

2. スポーツ観の変容

1つ目のカテゴリーグループである「スポーツ観の変容」では、3つのカテゴリー「従事による肯定的変化」、「プロクラブへの認識変化」、「必要性の発見」が挙げられた。まず、「従事による肯定的変化」に属する行動に注目すると、「スポーツボランティアを行う前には、試合を見ることができないのに、ボランティアをしている人たちは楽しそうにしているということに対して疑問をもっていたが、スポーツボランティアを通して、スポーツボランティアの必要性や楽しさが理解できた」という回答があった。このような回答は、スポーツボランティア活動を通して、スポーツを支える側の一面を感じ取っている回答である。スポーツボランティアに従事することによって、活動当初からスポーツボランティア活動に対する考え方の変容が生じていると考えられる。「プロクラブへの認識変化」についての回答では、スポーツボランティア活動を通して、プロクラブの活動や1試合の運営が行われるために従事している人数への気づきが挙げられている。さらに活動を通して、プロクラブへの愛着心に気づいたと回答されており、スポーツボランティアを通して、プロクラブに対するイメージやクラブ運営に対す

る認識の変容がみられた。これは「必要性の発見」においてもいえることである。スポーツボランティアとして、スポーツを支える側に従事することによって、「Jリーグの1試合を運営するためには必要な仕事が多くあり、これらを準備をしている人たちがいることによって、観客の熱気を生んでいることに気付いた」と、プロスポーツという華やかな世界を支えるという活動の必要性について回答している。本稿は、Jリーグの運営ボランティアに参画した学生を対象としたことから、より支えるという一面を実感しやすい環境化にあったと考えられる。これはスポーツをする、みるだけでなく、スポーツを支えるというかわり方への気づきを促すうえで、重要な学習環境として検討していく必要があると考える。このようにJリーグの運営ボランティア活動に従事することによって、支えるスポーツの必要性を実体験し、スポーツ観の変容が生じたといえるだろう。

3. 価値観の拡大

2つ目のカテゴリーグループである「価値観の拡大」では、4つのカテゴリー「積極的思考」、「新たななる挑戦思考」、「新しい自己への気づき」、「他者への気づき」が挙げられた。まず、「積極的思考」では、ボランティア活動を通して、自身の課題克服につながったという回答が得られた。人見知りやコミュニケーションが苦手であったという学生が、運営ボランティアでの活動を通して、他のボランティア従事者とのかわりから主体的に試合観戦者とのコミュニケーションをとることができたと回答している。これは継続的な運営ボランティアへの参加から人とのつながりを強く実感しており、ボランティアとしての責任感や自身の課題に対して意欲的に取り組み意欲を生み出していると考えられる。また「新たななる挑戦思考」において、スポーツボランティア以外のボランティア活動への意欲が生じたといった回答がみられている。このことは、特に、運営ボランティアに参加し続けている人に対して、「なぜボランティアに参加するのかが今は少しわかる気がする。それはたぶんお客様の笑顔が見たいからじゃないかなと思った。2回目まではそんな気持ちにはなれなかったが、3回目のボランティアに参加したときお客様の笑顔をみてそう思った」という回答から、「積極的思考」と同様に活動を行っている人（ボランティア）や観戦者といった人とのかわりから得た経験によって、新たな活動機会にも求めるようになっていくと考えられる。「新しい自己への気

づき」や「他者への気づき」といったカテゴリーにおいても、同様に、運営ボランティアを通じて、「将来プレーヤーではなく、スタッフや関係者という形で携わるのも悪くないのかなと感じた」や「観戦した人にお疲れ様など声をかけてもらい、こういった仕事を楽しいと思っている自分がいた」といった回答のように、自身への気づきやスポーツ活動における改善や新たな活動への意欲に気づききっかけが挙げられている。さらに、「これまで大会に出場するときに、大会を運営する人のことや、指導している先生、先輩、後輩がいることを当たり前のように感じていたが、そういった人がいることによって、大会に出場できていく」という回答があり、これまでの自身のスポーツ経験を振り返ることで、スポーツ活動が成立するためには、様々な存在が必要であることに気づいている。今回の調査のように、スポーツボランティア活動を複数回行ったのちに自身の活動を自由記述式調査によって振り返ったことが少なからず影響しているであろうが、これまでのスポーツ経験を振り返るきっかけとなっており、運営ボランティアを通じた経験が自身の価値観を拡大する契機になっていると考える。

IV. まとめ

本稿は、環太平洋大学の学生が参加したJリーグの運営ボランティア活動を通して、どのような学習成果があるのかについて検討してきた。学生の学習成果として「従事による肯定的変化」、「プロクラブへの認識変化」、「必要性の発見」、「積極的思考」、「新たな挑戦思考」、「新しい自己への気づき」、「他者への気づき」という7つのカテゴリーを見出し、大きく2つのカテゴリーグループ「スポーツ観の変容」、「価値観の拡大」に分類できた。

1つ目のスポーツ観の変容は、スポーツボランティア活動に参加することによって、スポーツを支えるという視点が生じることが明らかになった。今後、スポーツボランティア未経験である学生のスポーツ観と経験後のスポーツ観の変容を明らかにしていくことで、より詳細なスポーツ観の変容を学習成果として提示することができるだろう。2つ目の価値観の拡大は、人とのかわりによって生じていることが明らかになった。スポーツボランティアを継続する理由として、運営スタッフやボランティア参加者同士のつながり、実際に観戦に来る観戦者との交流を経験することで、スポーツボランティアを継続することにポジ

ティブな回答をしていることがみてとれた。このことは、これまで先行研究にて、スポーツボランティアの継続意欲等に関する研究にて明らかにされてきた結果と同様であり、スポーツボランティアの学習成果として、今後も検証していく必要があるだろう。さらに、スポーツボランティアを通して、自身の活動の幅を広げたいという意欲につながっていることに注目すべきだろう。本調査では、Jリーグの運営ボランティアに3回以上参加した者の回答を分析対象としたことから、複数回の参加による変化が記述されており、そのほとんどが自身の変化に気づいたという回答であった。このような他のボランティア・運営スタッフとの交流、観戦者との交流が生じる機会は、スポーツボランティア活動において重要な成果につながる可能性があると考えられる。本調査対象ボランティアのみの様相である可能性もあるが、本稿では、人とのかわりによって価値観の拡大が生じており、今後、どのようなかわりがより変化を生じさせるのかについて把握していくことが必要であると考えられる。スポーツを支える活動として代表的であるスポーツボランティアを行うことで、その他の地域貢献や社会貢献活動へと波及していくのであれば、スポーツボランティアがもつ教育効果を提示するうえで不可欠であろう。

以上、2つのカテゴリーグループに7つの仮説的な学習成果が把握された。しかし、本稿にて把握した学習成果は、あくまでも仮説段階であり、今後も継続的な研究にて学習成果を実証する必要がある。自由記述式調査だけでなく、インタビュー調査を並行して実施し、より詳細な学習成果を把握していくことが課題であろう。

今回調査対象とした大学生は、体育・スポーツ系の学部・学科、大学運動部に在籍する学生であり、今後、スポーツ活動を支える人材として活躍することが期待される。このような学生が取り組み活動に対する成果を明示化していくことができれば、学卒後も主体的にスポーツボランティア活動に取り組むことのできる人材を養成していくことができると考える。

引用・参考文献

- 金崎良三 (2005) スポーツ・ボランティア研究 (1) - 大学生のスポーツ・ボランティア活動についての意識と実態 - 佐賀大学文化教育学部研究論文集 9 (2) : 201-212
- 小林ゆき (2011) モータースポーツにおけるスポーツ・ボランティア活動と地域社会との相互関係 - マ

- ン島TTレースの事例から－. 白山人類学14：157-185
- 内藤正和（2007）大学生におけるスポーツ・ボランティア活動へのニーズに関する研究. 愛知学院大学論叢. 心理科学部紀要3：21-29
- 長ヶ原誠・山口奏雄・野川春夫・菊池秀夫（1991）スポーツイベントのマネジメントに関する研究－ボランティア継続意欲の視点から－. 鹿児島体育学研究紀要6：69-75
- 松本耕二（1999）スポーツ・ボランティアの類型化に関する研究－障害者スポーツイベントのボランティアに着目して－. 山口県立大学社会福祉学部紀要5：11-19
- 松尾哲也（1998）スポーツボランティア活動参与の規定要因に関する実証的研究－スポーツ及び生涯学習に関する認知／行動要因の影響を中心に. 福岡大学体育学研究28（2）：33-51
- 松岡宏高（2003）スポーツ・ボランティアを知る. 原田宗彦編著. スポーツ産業論, 第3版. 杏林書院. pp.103-113
- 西条剛央（2007）ライブ講義・質的研究とはSCQRMベーシック編－研究の着想からデータ収集, 分析, モデル構築まで. 新曜社
- 清水紀宏（2007）体育・スポーツ経営学の方法論的課題－自己批判から再構築へ－. 体育・スポーツ経営学研究21：3-14
- 関根正敏・柳沢和雄・川邊保孝（2009）総合型地域スポーツクラブの設立をめぐる正当性の確保と地域生活の歴史に関する研究. 体育・スポーツ経営学研究23：33-47
- SSF笹川スポーツ財団（2014）スポーツライフ・データ2014. 笹川スポーツ財団
- 谷幸子・中比呂志・山下秋二・清田美絵（2003）障害者スポーツボランティアの類型化に関する研究－活動期待の視点から－. 体育・スポーツ経営学研究18：1-12
- 豊田則成・金森正雄（2007）スポーツ・ボランティアを経験することの意味とは？びわ湖大学駅伝にボランティア参加した本学学生の「語り」から. びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要4：9-18
- ウヴァ・フリック：小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子（2002）質的研究入門－〈人間の科学〉のための方法論. 春秋社
- 山口奏雄（2004）スポーツ・ボランティアへの招待－新しいスポーツ文化の可能性－. 世界思想社
- 山下博武・行實鉄平（2015）徳島ヴォルティスにおける運営ボランティア参加学生の意識変容プロセス. 体育・スポーツ経営学研究29：33-51